

多言語対応推進セミナー2018

多言語対応普及啓発映像のポイント解説

解説：早稲田大学教育学部 教授 バックハウス・ペート氏（映像監修）

私は、長年社会言語学の分野から東京をはじめ首都圏全体の多言語状況をみてきました。その出発点は15年前で、調査内容は、都内はどこまで多言語化しているかを把握するというのが目的でした。

調査箇所は、山手線全ての28駅周辺です。各駅周辺の2つの信号機の間で、全ての「表示」を数え、多言語表示に値するものを記録・撮影しました。記録・撮影したのは、日本語以外、日本語の代わりに他の言語を含む表示、またはローマ字、ふり仮名、点字の日本語を含む表示です。結果は、非多言語表示が約80%、多言語表示が約20%の割合でした。非多言語表示は日本語のみで、残りの20%程度で多言語表示があり、そのほとんどが英語を付記したものでした。中国語、韓国語は4%以下で、その他の言語はほとんどありませんでした。

日本全体の中では、広告のような内容の看板が多く、細かい内容は全て日本語で書かれ、日本語が読めなければ分からないものも多い。自転車放置禁止の看板では、日本語、英語、中国語で対応していたが、例外的な存在でした。さらに、全体的な内容がややネガティブで、おもてなしという気持ちが伝わらないものでした。調査時点では、バスの行先表示や駅の乗り換え口などは調査していません。

2003年の状況と比べて、どれだけ多言語化が進んでいるか。まず交通の面で2003年の時点では、バスまたはタクシーは、ほとんどモノリンガルでしたが、現在は少しずつバイリンガルになり、四言語対応もあります。

多言語対応の基本的な考え方としては、まず日本語+英語+ピクトグラムで対応すること。これは最近普通になっており、逆に日本語のみのものは少しずつ無くなっています。次に、地域の特性や視認性を考慮しながら、中国語、韓国語、さらに他の言語にも対応しましょう。この4カ国語で定着させればいい。看板に限っていえば、それ以上に言語を増やすと読みにくくなったり、分からなくなったりすると思います。

それと、よく聞かれるのが、全てを訳す必要があるのかということ。例えば、禁煙のポスターですが「お願い+たばこのピクトグラム+終日禁煙+NO SMOKING+駅構内は禁煙です。お客様のご協力をお願いします」というものを見かけますが、ここまでは必要ありません。重要なのは、NO SMOKINGだけ英語にして、真ん中にピクトグラムを付ければそれで充分です。必要最低限の情報で充分です。

それと、英語とローマ字の違い。できればローマ字にするだけでなく訳したほうがいい。地名の場合は原則として一般名詞は英語に訳し、固有名詞はローマ字にします。「上野公園」であれば、固有名詞は上野で公園は一般名詞になり「Ueno Park」となります。ただし、場合によって表現が変わります。例えば、新宿御苑は「Shinjuku Park」？、「Sinjuku Gyoen」？これについては、まず全体をローマ字化し、通常名刺の部分、一般名詞部分だけプラス英語として「Shinjuku Gyoen Park」となります。

看板や標識などでの多言語対応の基本的な考え方での配慮事項をまとめます。

- ①文字が多すぎると標識が見づらくなってしまいます。視認性に配慮しつつ、表示内容を工夫しましょう。
- ②統一性や連続性のある表示を心がけましょう。
- ③景観や美観にも配慮するよう気を付けましょう。
- ④ユニバーサル・デザインに配慮しましょう。

標識で、日本語と英語の占める面積の割合は、以前、英語は日本語の1/2程度でしたが、現在は2/3。これが一番適切な割合だと思います。

ローマ字は、ヘボン式のローマ字を使う。外国人に発音が分かりやすい。最後に、統一性のあるピクトグラムが重要で、非常に有意義な情報伝達手段です。

（平成30年作成）

